

## 60年間の研究から得た教訓： すべきこと、してはいけないこと。

西村 暹\*

昨年仙台で開催された年会で、年会長の山本雅之先生から、Meet the Expertのセッションで、研究成果の内容より一般的な話を、とのことで講演を依頼され、このようなタイトルで話をさせていただいた。若手の研究者の参考になればと思い、同じ内容で執筆することにした。45分の講演を全て書くことはできないが、重要な点を抜粋した。

### すべきこと

(1) 他人がどう評価しようとも、自分の実験で見つけたことは、大切にす。

東京大学大学院生時代(1960~1965)に所属した、応用微生物研究所第5研究室(現分子細胞生物学研究所)のテーマは、タンパク質合成機構の解明だった。斬新なテーマだったが、いかんせん成果は上がらなかった。私はアミラーゼの生合成研究の過程で、枯草菌が菌体外にRNaseを排出することを見つけた。研究報告の時、副的な話として述べたところ、赤堀四郎先生から、もっと続けたらとのコメントをいただいた。これが契機で博士の主論文となる枯草菌の菌体外RNaseの同定につながった。

1970年代、大腸菌tRNAから修飾ヌクレオシドQを見つけ、生化学会年会で発表した。反響はイマイチだった。しばらくして、江上不二夫先生から電話をいただき、大変に面白いと褒めていただき、朝日賞に推薦いただいた。大いに元気付けられた次第である。

(2) よい指導者にめぐりあう。または選ぶ。

私の場合はこの点大変幸運だった。研究などはいわば徒弟奉公のようなもので、自然と先生の良い面を学ぶとともに、マイナスの面もまねをするようになるものである。

(3) 成果を共同研究者と共有する。

これは単に論文の共著者にするとか、感謝すれば済むものではない。

(4) 自分のやりたいことを第一優先にし、それにあった職場を選ぶ。

国立がんセンター研究所を定年退官する際に、どこかの国立研究所の所長の可能性もあったが、自分は万有製薬つくば研究所の所長職を選んだ。それは既存の組織の代表でなく、自分の裁量で研究所全体の研究を推進できるからであった。

当時の国立がんセンター研究所総長の杉村隆先生に相談したところ、大いに賛成していただき、定年前でも行く方が良く、80人の研究所など話がうますぎる。しかし、たとえ30人でもOK、と元気付け

ていただいたのを思い出す。

### やってはいけないこと

(1) Greedy (欲張り) になるな。白旗を上げることも大切。

研究者はともすれば小さな子供である。欲しいものがあるとどうしても欲しくなる。それが過ぎると他人のものまで欲しくなる。特に自分が第一人者と考えている領域で、他の研究者に先行されると、いてもたってもいられなくなる。それが高じると、不正とも思われる方法で、あたかも自分が先にまたは同時に論文を発表するように工作する(国内外に多くの事例がある)。表向きはそれで済むが、知る人は知るである。結局は本人の評価を落とし、また真の友人関係が失われる。

(2) いつも日の当たる場所にしようとして、無理をするな。

研究が軌道にのると、毎年、学会などで招待講演をしたり、シンポジウムオーガナイザーになるようになる。しかし、いつも研究が進むわけではなく、それで無理をするようになり、成果を強調するため、over speculationをするようになる。データがない時は、じっくり仕事を続けることである。

(3) 頼まれない限り、学会活動にかまけるな。

自分自身は、研究者として確立するのは、あくまで自分の研究成果によると考えている。勿論、学会活動に貢献するのも研究者の評価の一面だが、(自分の先生のDr. Gobind H Koranaのスタンス。)

### 心がけること

(1) 好きなことをやるのが第一。

日々の研究を進める力は、人各々の性分のようなもので、自分は手先を動かすことが好きで、未だに毎日自分でHPLCを動かしている。

(2) Hard Work.

今の時代に合わないかもしれないが、何十万という研究者に先んずるには、よほど頑張らないと難しい。研究は人のためでなく自分のため、指導者に言われてすることではない。昔、面白いデータが出たのも年末年始の時だった。私は今でも、朝8時頃から午後4時頃まで、他に用事がなければ研究室に出かけている。これが可能なのも妻の理解があつてのことだが、そのような伴侶にめぐりあえたことは幸いだと思っている。

(3) 研究は生活の一部である。日々が楽しくなければ意味がない。

研究室内で揉めることは避けよう。言いたいことは主張しても、相手のことも考える。揉めていては、お互いに元気も出ない。

\*筑波大学生命科学動物資源センター、客員研究員

DOI: 10.14952/SEIKAGAKU.2017.890599

© 2017 公益社団法人日本生化学会